

『ダーウィンのミミズの研究』

たくさんのおしぎ傑作集

新妻昭夫 文、杉田比呂美 絵 福音館書店



ミミズは以前はどこにでもいる虫でした。

私が子どもの頃は毎日のように目にしていました。頭や目はあるのかしらとか、大きいのが小さいのがいるけれど、同じ種類なのかと不思議に思ったり、時には鶏に餌として与

えたり、身体を途中で切ってしまうとどうなるかと試してみたり等、言わば、ミミズの敵のような人間でありました。ミミズにおしっこをかけると、おちんちんが腫れるとも言っていましたね。

最近では道という道は舗装され、マンションの周りはコンクリートで固められ、一戸建てに住む人も除草や駐車スペースのために、庭をコンクリートで覆っている事が多いようです。こんなに表土が少なくなって、ミミズはどうしているのかと、ちょっと心配しています。

この本は動物学者の新妻さんが、「種の起源」で有名なダーウィンが40年もミミ

ズの観察や研究を続け、最後に「ミミズの作用による肥沃土の形成とミミズの習性の観察」という本を書いた経緯を紹介しています。

ダーウィンによれば、ミミズは音が聞こえ、光を感じるそうです。また、ミミズは考えて行動しているとのこと。ミミズは地表を1年に6mmほど耕してくれますので、沢山いれば柔らかで肥沃な土にしてくれます。ミミズが耕す深さを、一定の広さの土地でミミズの糞を1年間一山残らず集め続けて、推定したりしました。ドイツ人学者は1m四方に13.3匹ミミズがいることを突き止めたそうです。

著者の新妻さんはダーウィンがミミズの研究をした土地の、ミミズの活動その後を知りたくて出かけます。さて、その結果はどうだったのでしょうか？

この本はミミズのような身近な虫も研究対象になりうることを、まだ分かっていないことも多いということを教えてください。西緑地では1m四方にどのくらいミミズの糞の山があるのでしょうか？

(齋藤好子)